

# 子どもが友達と出会って 自分づくりをしていく過程

— N子とY子の育ち合いを通して —

山田陽子



JASRAC 出 0806128-801

はじめに

子どもは集団の場で友達や保育者と出会い、関係を紡ぐ中で「かけがえのない自分」づくりをしています。このことを、私はN子とY子に学びました。

二人は知的に障害のある子どものための愛育特別支援学校の小学部で出会い、入学から卒業まで

の六年間を同じクラスで過ごしました。クラスメイトは入学時は五名で卒業時には八名になりましたが、女兒はこの二人だけでした。私はほかの保育者と共に六年間担任しました。二人はかかわりの中で、互いに影響を及ぼし合いながら、それぞれの成長を豊かなものにしていきました。

ここでは、その中身について紹介したいと思います。

## それぞれが自分の世界を広げる

Y子は小学部から入学し、初めて集団生活を体験することになりました。当初は登校すると、まずは近くの公園を母親と散歩しました。心の準備をしているのだと思えました。校内では母親に負ぶわれたり抱かれたりして、クラスルームの隣のホールで過ごしました。手には必ず兄の参考書や姉の財布などを持ち、家族とのつながりを心の支えにしていました。私もY子と母親のように、体の触れ合いを通してつながろうとすると、Y子は緊張した笑顔で「私の中に踏み込んでこないで」と断ってきました。Y子は私と触れ合うことで、私に自分の存在をのみ込まれてしまいそうな不安を抱いたのだと思います。Y子の笑顔からは「あなたの存在を拒否しているわけではない」という優しさが伝わってきました。その一方でY子は、

ほかの子どもが保育者に抱かれたり負ぶわれたりしている姿を見かけると引き寄せられるようにしてそばに行き、その子どもが一人で動き出すと母親の所へ戻るのです。

N子は幼稚部から在籍していました。この時期のN子は親しい保育者に「上下（うえした）行くの」と要求を出し、抱っこされて階段を上がって二階へ行き、静かな空間で過ごした後「今度は下へ行く」と言って、一階に戻ることを日課にしていました。子ども集団の中で生活することに緊張があったのだと思います。また親しい保育者が自分の期待に繰り返し応えてくれる体験を積み重ねて、保育者との信頼関係をより確かなものにしようとしていました。N子はこの活動の際に、必ず童謡の『うみ』を保育者と一緒にうたいました。歌詞の中の「いつてみたいなよそのくに」の「いつて」というのを強調していました。保育者

との信頼関係を基盤にして、自分の世界を広げる  
タイミングを計っているように感じられました。

Y子はN子の階段の上り下りが始まると、N子の服をしっかりと片手で握り、もう片方で家族の持ち物を握って同行していました。Y子は保育者をしつかり心のよりどころにしているN子と自分を同一視する形で母親以外の大人を心のよりどころにしながら、愛育という新たな場所を自分の世界に組み入れようとしているようでした。

### それぞれの好きなことを自分で広げる

Y子はN子がハモニカを吹くとすつともらって吹き始めます。N子がトランポリンに乗れば、自分も乗ります。N子がやることは、自分にとって初めてのことも迷わず同じようにやりたがりません。昼食の際、Y子はN子のお弁当から自分の好きなおかずをすつともらって食べようとします。

私が待ったをかけると、N子は気前よく自分のおかずをY子のお弁当箱に入れてあげます。お返しに、Y子は自分のおかずをN子のお弁当に入れてようとします。するとN子は泣きだし、自分の髪を引っばったり手を床に打ち付けたりするのでした。N子は自分から差し出すのはよいのですが、受け取ることに抵抗がありました。私はそのことを氣遣っていました。Y子はありのままにN子に働きかけていました。

N子は友達とのかかわりを求めているものの、相手から予測のつかないかかわりを受けると不安になり、反射的に相手の髪を引っばってしまうことがありました。Y子は自分との間にそういうことがあっても、変わらずN子の心のそばにいようとしていました。N子にとってY子は不安の種でもありません。うれしい存在でした。

そんなある日、N子は「Nちゃんもやってみ

る」と言って、自分がやることを表明したうえで、魅力的だと思えるY子も含めたほかの子どもの遊びをまねるようになりました。中にはこれまでにN子が避けていたような遊びも含まれていました。N子のまねる行為は受け取ることであり、自分自身の殻を破ることでした。

### 自分の思いを相手に

#### 表明するやり方を学び合う

二人は自分の思いを相手に表明するときのやり方が異なります。たとえば、私がある時期から、さまざまな事情でゆっくり登校した子どもに「待っていたわよ」と声をかけるようになりました。あなたが登校するのを私は楽しみに待っていたこと、愛育と出会った現在からここの生活が始まるのであって、すでに始まっているほかの子どもの生活に気後れする必要はないことを伝えよ

うとしました。私と彼らとのやりとりを見ていた二人は早速、N子は「まっていた」（先生、私のこと待っていてくれたよね？）、Y子は「いたあ」（いたあ。先生が私のこと待っていてくれた！）とあいさつするようになりました。また、ピアノで弾いてほしい歌を要求するとき、N子は「今度は何がいい？」と自分の方から私に問いかけるような形で持ちかけ、私が改めて「今度は何がいい？」と尋ねると、好きな歌を言います。Y子は「おうた」と言って要求し、自分の思いと違う歌を弾くとすぐに「（違う）おうた」と言って、率直に自分の願いを伝えてくるのでした。N子は時折、意を決してという感じで、Y子をまねて「いたあ」「おうた」ということがありました。

N子は日ごろの会話は言葉をよく活用していました。Y子は言葉以外の表現が多いのですが、自分の大好きな人の象徴である「お母さん」という

言葉で男女問わず親しい保育者に呼びかけ、「先生」「おうた」など自分にとって一番必要とする単語を獲得しては、状況に応じて表情や体での表現と合わせて多義的に活用していました。

N子が「ちよっとさみしいの」とか絵本を見ながら「新幹線乗りたいなあ」などと自分の思いを柔らかな語り口で率直に伝えるようになったころ、Y子が私に「おかあさん」と呼びかけて、「なななななななななな」とN子のイントネーションをまねながら、会話を向けてきました。

二人が、それぞれ相手に憧れをもって、自分の中に取り入れようとしていることが伝わりました。

お互いに、一緒にいるのが楽しいことに気づくことで、自己を調整しようとする

N子とY子とクラスメイトのA男は三年生の時

期、毎日のようにホールにあるピアノで自分たちの好きな歌を弾いてほしいと要求してきました。

おもしろいのはこの内の誰かの要求に答えているとほかの二人が音を聞きつけてやってくることです。三人が集うときにぎやかで、楽しさが増しました。当初歌なら何でも好きよという感じだったY子が、N子やA男のように積極的に楽しみたいと思ったのか、自分の弾いてほしい歌を主張するようになりました。反対に、私が自分たちの好きではない歌を弾くと泣きだしていたN子と、怒って私の手を振り払っていたA男は、自分の中で折り合いをつけながら、一緒に楽しむようになりました。自分の楽しさと相手の楽しさが重なり合うこととの喜びを体験した表れだと思います。

二人が四年生になったころ、N子は遊びに行っただほかのクラスで子どもたちが歌のテープを聴いていて、それが自分の好きでない歌の場合の対処

の仕方を「止めてもらおう」「ほかの歌に変えてもらおう」のほかに「場所を移動する」「○○ちゃん  
の好きな歌だということで納得して聴き続ける」  
「好きな遊びをしながら次の歌を待つ」というよ  
うに選択肢を増やしていきました。Y子は、自分  
の弾いてほしい歌をはっきり主張するものの、私  
が応えられない状況のときに事情を話して「Y  
ちゃん自分で弾いてて」と促すと、弾きながら待  
つようになりました。

このように周りの状況に応じて自己を調整して  
いこうとする中で、二人とも、より自由になっ  
ていくように見えました。

### 目の前にいなくても 相手の存在を感じる

Y子の持ち物にN子の写真が加わりました。そ  
れは愛育通信（各学期の終わりにその子の生活の

様子を写したスナップ写真と成長の記録を子ども  
と保護者に向けて作成し、配布するもの）を切り  
取ったものでした。私は友達を意識するのに写真  
が有効だと気づかされ、クラスの壁に貼って、台  
紙を張ることで取り外しが自由になれるようにし  
ました。その後、Y子は登校して、まずはその日  
持ち歩く写真を選ぶのが日課になりました。

Y子の愛育通信は毎年ボロボロで、愛読してい  
る様子が伝わってきました。あるとき、風邪をひ  
いて欠席したY子に電話すると、母親が「あつ、  
今Yちゃんが愛育通信の山田先生の顔を怒ったよ  
うに見て、キスしています」と実況報告してくれ  
ました。

N子も同様で、彼女が手術のために入院した際  
にお見舞いに行くと、後から来た父親が「Nちゃ  
ん、君の宝物を持ってきたよ」と言って愛育通信  
を渡しました。N子は喜んですぐに開き、私を

誘って一緒に見ました。見終えると枕元に大事そうに置きました。二人の心の中に、愛育での友達や保育者との生活がすっかり根付いていることが伝わりました。

### 相手のために

#### 何かをしてあげたいと思う

五人のクラスメイトのうち、N子とY子を含めて四人が発作の薬を服用していました。私は誰かが発作を起こしてクラスのソファベッドで休んでいるときは、目覚めたときに安心してほしいという願いから、そばについていました。二人は自分たちの好きなおもちゃを持ってソファに上がり、時にはほかの子どもも加わったりして、みんなでぎゅうぎゅうになって過ごしました。

N子は体に変調を来したとき「ちょっと変」と言って、周りの保育者に伝え、しばらく休みま

す。ほかの子どもが発作を起こしたときも「ちょっと変」と言って、自分のことのように気にかけて、そばで見守っていました。

Y子はN子がホールで泣いたとき、隣で切なそうな表情で見つめていました。そして、クラスルームから涙を拭くものを見つけてきました。それはたまたま雑巾でした。洗濯したてだったので、N子の涙と、そんなY子の優しさがうれしくて出てしまった私の涙も一緒に拭きました。

#### 相手の顔を見ると

#### 元気になる

四年生の三学期ころから、N子とY子は一緒に過ごす時間が少なくなっていました。

N子は朝「待ってた」と私にあいさつした後、一人で自由に学校中を闊歩していました。出かけていった先で出会った保育者とおしゃべりした

り、一人でお気に入りの絵本を見たりトランプを跳んだりして、好きな活動に取り組んでいました。そして時折「さみしくなったの」とクラスに戻ってきては私の膝で休んで、また出かけていきました。

Y子が五年生になったときに、弟が生まれしました。Y子は、保育者と子どもの二者の関係づくりをていねいにやっている所にいちずに入って行って、その保育者とかかわろうとしました。相手の子どもに応じて、ほかの保育者が入って四人で過ごしたり、三者関係で過ごすことに意味があると思える場合は当事者の保育者にまかせたりしました。Y子の人間関係の変化は、周りの人たちの関係にも新しい風を吹き込むことになりました。このころY子は「好き」という言葉を発するようになり、親しい保育者の顔をじつと見据えて、何度も繰り返す中で、一生懸命自分の思いを相手に伝えてい

ました。その姿から、Y子が自分の思いにしっかりと向き合っていることが伝わってきました。

こうやって二人は、それぞれの課題に向って行動を起こしていましたが、Y子はN子に会うとうれしそうで、より元気な表情になりました。N子もY子の姿を見ると安心するようでした。一緒にいなくてもつながりは消えないことを、二人は体験から学んでいました。

### 終わりに

N子とY子のお気に入りの歌は『友達讃歌』でした。Y子が三年生のとき初めて自分で見つけてきた歌で、そのことがうれしくて、N子をはじめ周りの保育者や保護者も一緒に繰り返しうたいました。つながり合う喜びを、二人はみんなに伝えてくれました。

(中部学院大学 子ども学部 子ども学科)